

Title	繊維16社の多角化戦略と経営成果
Sub Title	
Author	荒川篤(Arakawa, Atsushi) 古川公成
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1986
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1986年度経営学 第451号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001986-0451

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名 荒川 篤

主査 古川 公成

副査 小野 桂之介

所属ゼミナール 古川 公成 研

高木 晴夫

繊維16社の多角化戦略と経営成果

本論文の目的は、繊維16社(合繊7社、紡績9社)について多角化戦略と経営成果との関係を明らかにすることにある。

その先駆的研究としてルメルト、吉原英樹他による多角化分析があり、それを繊維16社に当てはめた結果も、同様な結論を得た。それは既存の技術やマーケティング面での強みを生かした方向での、従ってシナジーを発揮する方向での多角化はすぐれた成果を上げ、反対に、相互に関連の少ない多様な事業に資源を分散するような多角化は、成果が低いというものである。

しかし、相互に関連性の少ない分散的な多角化企業にも業績の良い会社はある。そこで、最も業績の良い旭化成、東レ、帝人の3社について多角化戦略を詳細に検討してみた。その結果、各社の多角化戦略は技術ベースの多角化であり、技術をベースにして多角化するとき、既存の蓄積技術を土台にすえて、それから外部に有望な市場を探すという方法と、はじめに有望な事業機会を見つけ出し、その後で果してその事業を実行するのに必要な技術が自社に蓄積されているか否かを検討するという方法の2つがあることがわかった。

結論として、企業のもつ技術の集合のうちから有望な技術を見つけ出し、その技術をベースにして新しい事業分野に進出し、そしてその新分野で蓄積する新しい技術をもとにしてまた新しい分野に出ていくという方法で、良い方向に向いた多角化を続けることが大切なのであり、多角化戦略は他社との間に技術的な競争優位を作り出す方法にもなることが明らかになった。